

附 諸生党・市川三左衛門

松山戦争の敗北で、朝比奈父子、寛助太夫らを失なった市川は、諸生党唯一人の生き残り幹部として逃走していた。



市川三左衛門

『水戸藩史料』によれば、市川は銚子で長岡藩兵らと別れるにあたって「我が輩今や身を容るゝの地なく命を天運に任すの外なし、聞く我同志下総流山にありと因りて我が輩は是より流山に赴かんとす、」と語ったという。一方『水戸藩見聞実記』は、佐倉への逃亡説を挙げている。

銚子から流山への道は、利根川を船で逆行するのが最も合理的である。従って八日市場を経由することは、遠まわりであり、仮りに同志が待っていた

としても流山への逃亡は困難であつたらう。流山は新撰組や誠忠隊が駐屯した場所でもあり、田中藩本多家の佐幕派代官須藤力五郎の出身地でもある。しかし諸生党関係者がいたという話しは聞かない。

地元の資料（大川逞二氏『そうさのおちば』）によれば、松山村を脱出した市川は、西へ落ち西高野（八日市場市内）の大木左内宅へかくまわれたという。右腕に深手を追っていた彼は、大木左内宅で手当をうけ、傷が直るのを待って二人は夜村を出た。途中唐がらし売りなどに変装して、江戸を指して進んだが、警戒の目がきびしいので、下総市川宿で別れた。その後、江戸へ入った市川は、末娘徳の嫁ぎ先である芝三田の宝徳寺に潜伏したという。この宝徳寺は、諸生党の同志であった鈴木石見守重棟が水戸を脱走して潜伏した芝白金の忍願寺に、ほど近い場所である。鈴木は、すでに四月二十三日に水戸へ連行されて斬殺されている。

市川三左衛門は、文化十三年（一八一六年）水戸棚町で生まれた。幼名善次、主計といい名は弘美、代々三左衛門と称している。天保十四年（一八四三年）大和流射術指南となり、嘉永元年（一八四八年）三十二歳の時に小姓頭となる。安政五年（一八五八年）に大寄合頭、七百石取りとなる。元治元年六月に執政となる。慶応元年（一八六五年）三千石となる。

江戸へ潜伏した市川は、久我三左衛門と偽名を使い、青山百人町に住む松平左兵衛督信発の

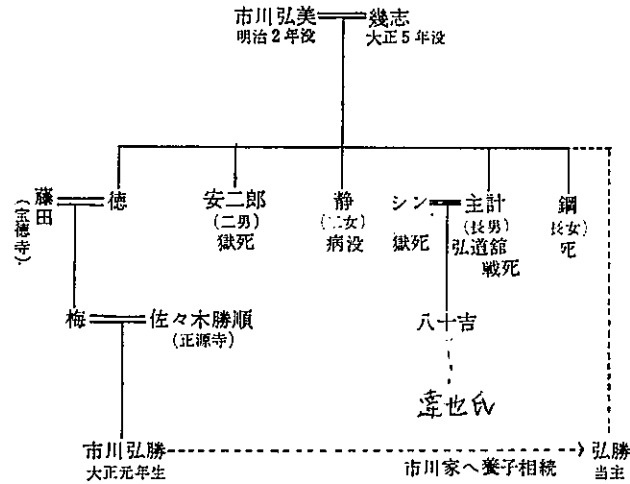
比方は式台から上って市川の手を掴まへて引き下して縛りまして、腰縛にて引きました。  
 丁度其晩は酷い雨でしたが傘も差させず、尻を捲って、今の砲兵本廠の前の入墨御門という所まで何の気なしに来ました。それから市川此門は見覚へはあるかと云ったら始めて驚きました。最早足が運ばなんだであります。奇体には痛いことを知らぬ男で何んなに拷問しても痛いとは云はず、特に意地のきたない男で水戸で三日間か市中に棒縛にして曝せし間も、何か食ひたひかと云ひますと鰻頭が食ひたひとか鰻飯が食ひたひとか言つて食はせると縛られながら、むしゃむしゃと食ふ位でありました」

このように市川三左衛門は、水戸藩の追手に抵抗することもなく捕えられ、水戸へ送られた。そして明治二年四月三日未だ旧幕兵らが函館を中心に抗戦している頃、次の罪状により逆磔の刑に処せられた。五十三歳であった。

市川三左衛門

此者儀累代御鴻恩を蒙り、重職をも相勤めまかりながら、年来鈴木石見等党与の者共と相語らい、去る子年中御目代大炊頭様御下国の節、御入城を拒み奉り示来御歴代様の御遺業破壊致し奸悪暴横の所業之れあり、畢竟先般京都より嚴重の御沙汰之れあり候処、一身の罪科を

市川家略系図



家臣であり、剣道師範の島上源兵衛(源五郎)宅にいた。しかし、明治二年二月二十六日雨の晩に水戸藩の追手に捕えられてしまった。  
 この時の様子について、追手の一人であった小又慶二郎は、明治二十七年二月の史談会で次のように語っている(『史談会速記録』)。

問、ぼる先生というは、青山の何処に住みし人です。幕人が浪人か。

答、五十人町です。撃剣家で幕府の人です。其家を初めは一小隊ばかり行つて取り巻いて水戸から来たと言はんで、尾張からだと言つて、隊長が応接した処、どうか家で縄を掛けて呉れると云う事でした。それまでに灰を紙に包んで目潰しの用意をしたと見えます。それから、ぼる先生が連れて、市川は短刀を掲げて出て来ました。其中に

免れ候ため兵威を以て朝命をも拒み奉るべしと、党与の諸生共を煽動し学校に屯集致させ候のみならず、容易ならざる謀計相企て脱走致し候後、越後表におゐて官軍へ対し数度抗し大逆の振る舞い少からず、あまつさえ君上を奪い取り奉り籠城致すべしとの存意に付、御領内に侵入連日御城郭に発炮御人数に敵対致し、敗走後処々潜匿致し居り、此度東京表に於て御召捕に相成り御糺明の上は追々奸悪の所業君臣の大義を取り失ひ候段一々恐入候旨申し立ての件々始末叛逆無道重々不届至極大胆の致し方に付、後昆の誠として和泉町並びに七軒町札場に生晒の上、上下御町へ引渡し長岡原場所に於て逆磔に行ふもの也。

巳四月三日

(『水戸藩史料』より)

水戸市松本町祇園寺には「法源院宗弘道盛居士」と記された市川三左衛門の墓がある。彼の辞世は「君ゆえに捨つる命はおしまねど忠が不忠になるぞ悲しき」。

この祇園寺には、諸生党記念碑ともいふべきものが建っている。撰文は脱走塚の吊英魂と同じ朝比奈知泉である。

明治戊辰悲徳川宗家之哀廃懐  
慨赴難者水戸藩士中不下数百

人而

皇恩洪大録宗家後焉遺靈亦可以

瞑矣茲拳其姓名録干碑背云

昭和九年甲戌秋

市川が処刑された四月三日に、九人の諸生党員が刑死させられている。その中には仙台で降伏した者も含まれていた。

磔 佐藤万衛門 照沼泰助

松葉介之允 大高熊之介

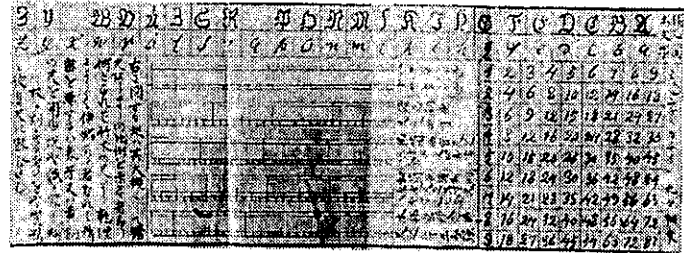
斬首梟首

吉野 英臣 内藤三之介

吉野金之助 本郷金衛門

高倉平三郎

松山を脱出してから、水戸藩士に捕えられるまでの四カ月間の市川の生活について、今日ま



三左衛門が独習したと伝えられる文書

で次のように伝えられてきた。

「十月水戸を脱し江戸に潜伏するや、到底志を得る能はずと観念し、私かに海外——ことに仏蘭西に渡航せんことを志し、仏語、独逸語及び幾何、化学等を独習せるものゝ如く」(『明治維新水戸風雲録』)と昭和八年に沢本孟虎は、三左衛門の曾孫にあたる市川弘勝氏から聞き出していた。そして、この記録を拡張したものととして、『覚書幕末の水戸藩』(山川菊栄、昭和四九年)や『天狗党始末記』(上村健二、昭和五二年)などがある。

この伝説の根拠には、三左衛門の妻幾志(大正五年没)からのいい伝え——「実を申せば夫は仏蘭西に通るゝ決心で居ましたが、外国船の出帆が一日遅れたので遂に捕はれたのです」(『風雲録』)——があるようだ。おそらく沢本氏は、幾志が三女である徳(大正十五年没)に伝え、それを弘勝氏が受け継いでいた話を紹介したのではないだろうか。

筆者は、市川三左衛門の十月以降の生活について、右のような生活

を送ったという確信が持てなかった。つまり保守に徹していた人間が、逃亡のはてに外国へ目をむけることはあっても、上村健二氏が評価するような「藩内抗争の視野の狭さや、徳川の再興を考える旧い思考の彼からいつの間にか一転して、世界にその視野を広げ、新しい学問に生きる道を求めていたのであった」(前掲書)という指摘は納得できないのである。

このため、沢本氏が五十年前に確認している史料(三左衛門の独習した文書類)を、実際に手にとることが必要であった。

その結果、市川三左衛門が独習したと伝えられる文書を、すんなり肯定することができなかったのである。

筆者は昭和五十四年七月に、芝高輪の泉岳寺近くに住む市川弘勝氏を訪れる機会に恵まれた。そこで五十年前に沢本氏も見ている市川三左衛門独習の文書に接した。筆者は沢本氏が『明治維新水戸風雲録』で紹介している仏語、幾何、化学等の独習した文書を吟味してみたが、沢本氏が述べる程の中味をつかめなかったのである。

仏語と称されているものが、アルファベットであり、幾何や化学と称されたものは、今日の小学校でも習う基礎的な内容であった。三左衛門が独習した文書を、筆者は明治初年の木版刷教科書のたぐいではないか、と考えていた。しかし国立教育研究所の回答は「雑学書のように

はないか」ということであった。

筆者は、市川三左衛門の逃亡四カ月間について、上村説、山川説、そしてその基礎にある沢本説に対して、未だに同意しかねている。しかし幾志の話しや、独習文書についての疑問をも追求しきれていないのが現状である。

むしろ『史談会速記録』に残された小又慶二郎の談話にうかゞえる市川三左衛門の姿に親しみを覚えている。